

高校生諸君へ

はじめに

本連載は昨年10月から加藤陽子さんの「それでも日本人は戦争を選んだ」を理解するために、孫の高校生のために始めたものです。かつての「日本史B」を基準にしています。

先月は1936年（昭和11年）の2・26事件を解説しました。今月も1936年を学びます

広田弘毅内閣の特性と12月12日に中国で起きた西安事件を中心にします。

1937（イクミナ）を理解するには必要な事ばかりです。

1,軍部の政治介入

1931年から始まった一連のクーデターの隠された目的は軍部が政治に介入することでした。軍部は次の戦争は国民総力戦になり、それには国民の協力が必要であるにも拘わらず、政党政治は経済恐慌に苦しむ国民救済の施策をおろそかにしていました。長引く経済恐慌が続く中でも農村の疲弊は激しかった。そこに目をつけた軍部は「農山漁村の疲弊の救済は最も重要な政策」と銘打って政治家が出来なかった肥料販売の国営、農産物価格維持、耕作権等の借地権保護、更には労働組合法の制定、適正な労働争議調停機関の設置等の弱者保護の政策を掲げました。「国民を組織するためには政党を主とした議会政治では駄目だ。兵隊の供給源である農山漁村に軍部の存在感を示します。多くの国民はそれが軍部独裁への道とは考えることは出来ませんでした。軍部は報道機関を統制し新聞ラジオを利用して「戦いは創造の父、文化はその母」（国防の本義とその強化の提唱・1934年陸パンと言われた。もともとは皇道派との争いを鎮めるために作ったが、その後広く国民教育に使用された）という思想を国民に浸透させました。

この年の2月14日永井荷風の有名な日記があります。

「日本現代の禍根は政党の腐敗と軍人の過激思想と国民の自覚なきことの三事なり。政党の腐敗も軍人の暴行も、これを要するに一般国民の自覚に乏しきに起因するなり。個人の覚醒せざるがために起こることなり。然り而（しこう）して個人の覚醒は将来に於いてもこれは到底望むべからざることなるべし」

至言であり且つ予言的な言葉です。

2016年の日本にも当てはまる警告的な発言です。

2・26事件以降、政治家や財界人は命が狙われるという恐怖感を持ち、軍部はその心理状態を利用して、軍に反対するとクーデターを起こすと言わんばかりの風潮になって、宮内大臣・牧野伸顕は隠遁してしまい、内閣総理大臣に嘱望された近衛文麿は「命が狙われる」という理由で断っています。（近衛文麿は後に三次の組閣をし敗戦後はいち早く憲法草案に着手する格好をとりGHQにすり寄りますが、東京裁判では死刑の判決が下り、その年に自害します）

難産の末、陸軍大臣を寺内寿一にすることで広田弘毅内閣が誕生しますが、発足にあたり軍部から多くの要求を突きつけられ、それを全て飲み陸軍大臣の「木偶」内閣となります。

2,広田弘毅内閣の施政

(1)軍部大臣現役武官制の復活 1936年5月18日

現役の軍人でなければ陸軍大臣・海軍大臣にはなれない。退役軍人の復活を阻止、皇道派の返り咲きを阻止し、統制派の独裁体制を構築します。閣議で軍部の気に入らないことが決められそうになると陸軍・海軍大臣が辞表をだす（陸軍海軍大臣がいないと組閣できない）と脅し、軍部が政治介入するための「伝家の宝刀」を広田首相は軍部に渡してしまいました。

(2)国策基準を軍部の意向に改めた。1936年8月

①外交国防相俟って東亜大陸における帝国の地位を確保する。

（東亜共栄圏の盟主となる）

②南方海洋に進出発展する（南進論・末尾解説）

国策の方向をこれまでのソビエトに対する北方を守る満州ばかりでなく、資源獲得のために南方方面にも進攻するという「北守南進」政策を謳った。

(3) 「防共協定」の締結

陸軍の革新派と外務省の親ナチス・反英米的革新グループの主導で、ドイツとの間で「防共協定」を締結した（後の日独伊三国同盟の基盤となる）
軍部はヒトラー政権の躍進に傾倒し、日本と同様に国際連盟を脱退したドイツと手を結んだ。これは満州へのソビエト軍の南下を恐れていた関東軍の要求であった。（西園寺公望談「結局、ヒトラーに利用されるばかりで、何にも得るところはない」他人事的談話である。日本の将来を諦めているかのようです。反対すると命が危ないと考えたのでしょうか）

(4) 不穏文書取締法の制定

言論弾圧を強化した。少しでも反政府的、反軍的なものは即座に取り締まられた。マスコミは迎合することで経営の安定化を図り、国民を戦争に煽った（安倍政権への過剰忖度は水面下の取締かも知れません）

(5) 「広田三原則」の策定

対華政策の根幹となる原則を作り日中交渉の前提条件として押し付けた。①排日停止②満州国の承認③共同防共（末尾解説）

広田弘毅は東京裁判で死刑に処せられますがその原因は、「この時に陸軍の政治的干渉を公認し、その上に官制を変えて日本を軍国主義化に導いた」からとされています。

3, 塘沽協定以後の日中関係

(1) 塘沽協定（たんくうきょうてい）

満州事変の一応の終結は1933年5月31日の塘沽協定とされています。塘沽協定に至った経緯は次の通りです。（詳細ベストピア348号参照）

①1933年1月初め山海関の国境駅で、日本の守備隊長・落合少佐が謀略で自分たちの手で手榴弾を鉄道に投げ込み、それを中国側の仕業であるとして、賠償を要求しましたが、中国側は拒否し交戦が始まります。1月3日、関東軍が山海関を占領。山海関は万里の長城が渤海に落ち込む東端にあり奉天と北京のほぼ中間に位置する要所です。次の標的は熱河省となり2月下旬から行動を開始し、4月10日長城線を突破し関内（万里の長城の内側）へ侵入。

山海関を越えられると言うことは中国にとっては国家存亡の危機です。5月22-23日北京から僅か30kmまで迫ったところで中国軍から停戦を求めてきました。そして塘沽で軍事事項のみの「停戦に関する協定」が結ばれました。ここで満州事変は一応終結とされています。塘沽協定の地図を示します



(2)

(2) 関東軍の謀略が続く

塘沽協定では、関東軍は外務省を抑えて政治問題に関する交渉権を握り塘沽協定で両国がつくり出した非武装地帯を日本軍が監督するという日本に優勢な協定を武力威嚇をもって結ばせました。。

中国共産党は満州事変から対日宣戦を宣言し塘沽協定以後はゲリラ戦で排日・抗日運動を強化したために満州国の治安は改善されず、関東軍はゲリラの討伐に苦戦し多数の戦死傷者を出し、軍事費も増え続けました。共産軍の抗日運動は日本軍にとって悩みの種となります。

満州国の領域は初めは東北三省 (p12地図参照) でしたが関東軍の野望は尽きず獣禽の如く喰い拡がる。、従来は内蒙古とされていた熱河省、更には万里の長城を越えて北京に近づき中国に国家的な脅威を与えました。

「戦争は勝てば勝ほど自らに脅威を増すもの」の如く塘沽協定以後も日本軍は華北5省 (p12地図参照) を蒋介石の国民政府から分離し傀儡自治化する必要を感じだした。それはソ連が革命後急速に国力をつけたことによる。

共産革命後のソ連は各産業の分野での5カ年計画を着実に進め、農業分野のみならず、重化学工業化でも成果を上げ、西洋側だけでなく極東の軍備補強も堅固にしてきました。

1934年の航空機数は日本の3倍にまで成長していたと言われていました。

満州は日本の生命線だといって戦いにとってきたが更にその線を延長せねばという不安と恐怖が関東軍に生まれてきました。そこで関東軍は広田三原則の後押しを得て華北分離作戦にでます。（華北については後述します）

。

1933年2月、日本は国際連盟を脱退し国際規範を守る必要が無いとして一層強硬路線を走り出しましたが、一方では、孤立して国際的な情報が不足して的確な情勢判断ができなくなります。

（1933年6月、中国はアメリカから大量の軍用機を購入し始めます）

1933年11月7-9日の北京会議で**関東軍は華北分離作戦の足がかりを固めるために非武装地帯に関東軍の駐留権を中国側に認めさせた。**

1935年1月4日、関東軍大連会議で板垣征四郎参謀副長が中心となって極秘文書が作られた。華北5省を国民政府から分離させ親日的傀儡政府の樹立をさせようとし、その姿勢は強硬で、場合によっては対中全面戦争も辞さないという戦略の確認をします。「華北では我が軍部の要求を忠実に実行する誠意ある政権以外には認めない—————」**（関東軍の驕慢は絶筆）**

5月17日政府レベルでは両国が大使を交換し日中関係の改善に兆しが見え始めたが、関東軍と支那駐屯軍は自分たちの頭上を越えたところで外交交渉されることを嫌って、彼らは柔軟外交ではなく武力で侵略を推し進めるために謀略工作繰りかえし、華北分離を強硬していきます。

（華北とはp12地図の5省のこと）

国内中央は関東軍の暴走をとめられなかったのか？黙認したのか？

暴走は大抵の場合、謀略で始まる。自作自演は常道手段である。

5月25日、①天津の日本租界で日本の特務機関から補助を受け取っていた反蒋介石親日派系の二つの新聞社の社長が相次いで射殺された。いずれも関東軍の謀略である。日本の天津領事館はこの事件は抗日テロであるとみて中国側に押外活動であると責任を追及した。

②同時期に、孫永勤が3000人の中国の東北義勇軍を率いて熱河省南部で激しい排日抗日運動をしていた。関東軍は日本軍に対する挑戦であると主張し5月20日長城を内側から外側に越えて討伐作戦を決行し24日壊滅した。

日本側は①②をいずれも塘沽協定違反と主張し、「日本と満州国に対する騒乱活動を北京・天津両市で継続するならば日本は**非武装地帯を北京・天津両市まで拡大する**。そのためには日本軍はいつでも出動するつもりである」と脅迫し大がかりな威嚇的な行為を実行しました。

6月10日上記事件の解決として**梅津・何応欽協定**を結ばせ、河北省内の蒋介石直属の武装秘密結社を即日撤退する。国民政府（蒋介石）は近く全国に対して排外排日の禁止命令を発することにさせた。

6月27日チハル省に潜入した日本軍の特務機関員4名が拘束された。これを利用して土肥原少将が排日機関の解散を要求し**土肥原・秦徳純協定**を結ばせた。日本軍の戦略は国民政府に排日抗日運動を止めさせ、華北分離作戦を遂行することであった。**華北分離作戦も各省が自発的に蒋介石の国民政府から自治権をとり独立するというお決まりの筋書きである。自分たちはその後押しをしているにすぎないという態度で華北5省の分離を目指していた。**

土肥原はまず非武装地帯で「自治」を実現させる方法をとった。

「自治」とは現地の中国人が蒋介石の国民政府から自治権をとって蒋介石の国民政府の支配から自由になり、いずれは日本の傀儡政府にすること。

土肥原は日本の傀儡に甘んじる殷汝耕を担ぎ出し**通州（北京から10数km）に「冀東（きとう）防共自治政府」を作った。（地図p4参照）（冀は中国では河北省を意味する。非武装地帯は河北省の東に位置しているためこの名前となった）**

蒋介石の国民政府は中国共産党との戦いを優先していたために日本と戦う時期と考えず日本の威嚇に屈して要求を全面的に受け入れた。

軍部は「中国は武力で脅かしていることをきかせるに限る」との従来の方針に自信を強化した。

日本政府も「広田三原則」を押し付け、強硬路線を露わにしました。

4,激しさを増す抗日救国運動

1935年8月1日中国共産党はソ連政府との共同の名で「抗日救国のために全同胞に告げる書」を発表し、国家・民族の滅亡の危機にあたり、全ての者が政見と利害の相違を越えて、抗日救国の神聖なる事業に参加するように訴え、全中国を統一した国防政府と抗日聯軍を組織することを提起した。これは国民政府内部に大きな影響を与え、「抗日」共闘気運の芽生となります。

10月20日、満州国の軍政顧問を日本の天津特務機関の扇動で停戦協定線上にある河北省香河県で約1000人の農民暴動を起こさせた。暴徒の中に日本人が多数含まれていたが日本側は農民自治運動とみなした。（示威行為）

11月1日、北京・天津10校の学生自治会名で「抗日救国のための自由を求める宣言」が発表されて、連合会が結成された。これは蒋介石の国民政府が日本との約束を守って自国の「反日」を厳しく取り締まっていたからである。

1935年11月に中国で歴史的な出来事があった。イギリスの援助を得て法幣を導入して貨幣の統一に成功した。広大な面積と多くの民族からなる中国は秦の時代から銀本位制度を基本としながらも各地の閥族内で流通する地方貨幣が混在していた。

貨幣の統一により蒋介石政府（国民政府）は紛れもない統一国家の中央政府になった。法幣は中国にとって救国と抗日戦の武器になっていく。

法幣導入はイギリスの援助にアメリカの支援が加わり、法幣によって中・英・米の三国の関係が親密になり、中国は英米を味方に付け日華関係の図式は日本対中・英・米の三国という構造がこの時に出来上がりました。

1935年12月9日、北京の学生数千は、華北自治反対、一切の内戦反対、言論・集会・結社・出版の自由等を要求して、デモ行進を行った。（これを12・9運動という）これを契機に抗日運動は民衆を巻き込み全国に拡大して行きます。

1936年1月、中国共産党は周恩来を書記とする政府軍工作委員会を発足させ、張学良の東北軍工作を強化した。共産軍は「中国人は中国人を撃つな。共同抗日、一致抗日」をスローガンにしていたので張学良の東北軍の兵士たちは同じ国民である共産軍との戦いに消極的になった。春から張学良と周恩来の接触が始まり夏には東北軍と共産軍は停戦を実現した。

張学良の東北軍は満州事変で故郷の地を日本軍に奪われて、関内に追い払われていた。そして1935年10月からは西北の中国共産党地区攻撃の第一線に立たされ「共産主義者皆殺し作戦」を蒋介石から命令されていたが次第に蒋介石から離れつつあった。

1936年4月17日、広田内閣は中国の同意を得ず、支那駐屯軍の増強を決定

5月14-15日軍隊を輸送した。華北の共産軍に備えるため、華北の在留日本人を保護することを名目にして、その数を1771人から5774人に増やし軍備も強化した。中国側はこれを内政干渉、華北侵略政策の拡大と受けとめ、各地で抗日救国を叫んでデモが始まった
(盧溝橋事件に関連)

1936年5月31日-6月1日にかけて上海で「全国各界救国連合会」の成立大会が開催された。6月に広西省に反蒋介石の政府が出来、蒋介石の国民政府と交戦を

開始し、これに西南省の反蒋介石派が加わり中国全土に抗日気運は日ごとに激しさを増し「抗日救国革命軍」を組織して北京・華北に北伐派遣すると次のような声明を発表した

- ①直ちに日本との一切の関係を断絶し、日支間に締結せる一切の屈辱的協定を全部取り消す。
- ②我が軍、今回の北伐は抗日を唯一の目的とし、一切の内乱に反対する。
(北伐とは上海・天津から北京に向かった軍隊を派遣すること)
- ③武力及び一切の民衆の力、吾人の民衆革命戦に加入せんことを希望する

3-2 1930年代の東アジア



6月13日広州で10万人の民衆が参加し全市の生活機能が麻痺したと言われるくらいに抗日示威運動が盛り上がった。デモに参加するため各官庁、各学校が休校、工場は休業、銀行は扉を閉ざした。交通機関は運転を中止する等「対日戦争の実行」「満州失地回復」を叫んだ。（これは凄い活動です）

5,西安事件

1936年12月12日、張学良が蒋介石を拉致する

この年の中国での最大の事件です。

(1)張学良の転向

何故、張学良が蒋介石を拉致したのか少し年代を遡ってみます。

1928年父である張作霖が日本の謀略で殺された後、7月22日、張学良は国民政府の軍門に帰し、三民主義に服従すると宣言しました。蒋介石の元で北京を中心とする華北の政治を任された。反国民政府軍（地方の軍閥）とも戦い、日本軍の誘いにも乗らず蒋介石に忠誠を誓って東北軍の首領となります。

1934年1月ドイツ・イタリアを歴訪し、集団（組織）は領袖（指導者）を擁護しなければならないと学び、蒋介石への忠誠が更に増した。その甲斐あってか蒋介石から河南省、湖北省、安徽省の防共副総司令官に任命された。然し共産軍との戦いに失敗します。

1935年10月再び西北反共副総司令官に任命されこの地方の共産党地区攻撃の第一線に立たされたが、又もや失敗します。この2度の失敗で張学良は反共が嫌いになった。何故この戦いをしなければならないのか？自分を故郷の地から追い出したのは日本の満州国である。日本こそ自分の敵ではないか？共産軍の方が正しいのではないかと考え始め1936年に入ると中国共産軍と接触を始め、4月9日には周恩来と延安で会談しました。

この当時の中国共産軍は蒋介石の国民政府の強力な反共戦により21万人の兵士が7万人にまで減少し陝西省、甘粛省の2省に追い詰められていました。蒋介石は共産軍を殲滅する時期到来として西安に20個師団と100機の航空機を投入して総攻撃を命じましたが張学良は命令に従わず、クーデターを画策します。

12月4日蒋介石は攻撃を督促するために西安に赴き滞在していましたが、12月12日午前6時25分、蒋介石拉致実行部隊の張学良親衛隊120名が蒋介石の投宿先に乗り込んで銃撃戦となった。蒋介石は裏山へ退避し岩間に一人身を潜めていたが部下の裏切りで場所が通報され捕囚の身となった。

(2)軟禁された蒋介石と張学良の会話を推定する

張学良「閣下、命は保証します。ご安心ください。お願いがあります」

蒋介石「何だ。何故俺を裏切った！」

張学良「もう内戦は止めましょう。我々の敵は日本軍です。

日本軍は華北だけに飽き足らず、南京をも狙ってくるでしょう。

我々国民は一つになって戦わなくては負けてしまいます。

緩遠では力を合わせて戦い勝つことができたのです」

蒋介石「お前は共産党になったのか。俺があんなに嫌いであったことはお前がよく知っている。信頼していたのだが—————」

張学良「私はこの国を救いたい一心です。今は共産軍と一緒にあって日本軍を壊滅するときです。国際連盟を脱退した日本は孤立し、焦って戦線を拡大するのみです。南京が危ないです。事は急ぎます。

ご決断ください」

蒋介石「周恩来は何と言っているのか？中国共産党は何と言っているのか？」

張学良「共産党は閣下を即刻、銃殺刑に処せと言っておりますが、周氏は違っています」

蒋介石「周は何を考えているのか、ソ連共産党と通じているのか？」

張学良「周氏はスターリンの指示に従うようです。」

蒋介石「それはどういうことだ」

張学良「スターリンは閣下を釈放せよと言って来ています。

それで周氏は『国民党を代表するカリスマ的な存在を殺すようなことになると抗日民族統一戦線が結成できなくなる』と言っています」

蒋介石「民族統一戦線か！あと一歩で共産軍を壊滅出来るという時に—————」

張学良「まだ、共産党軍の中には閣下の命を狙っている者もいます。私が命を懸けてお守りします。ついてきてください」

蒋介石「周に会わなくていいのか？」

張学良「いずれその時間はきます。最後に言っておきますが閣下の令息はソ連に人質として捕らわれました。よく考えて行動して下さい」

このようにして蒋介石は監禁された。

(3)中国共産党との交渉と釈放

国民政府は蒋介石の釈放を要求して、軍事顧問に雇っていたドイツ軍事顧問団ファルケンハウゼン中將の作戦で反乱軍（張学良）に奇襲攻撃を加え、共産軍には空爆を実施しました。

共産党の周恩来らが西安に入り蒋介石との交渉が始まり、蒋介石に突きつけられた要求は

南京政府の改組、諸党派共同の救国、内戦の停止、民衆愛国運動の解禁、人民の政治的自由の保証、救国会議の即時開催、政治犯の釈放、孫文遺言の遵守等8項目でした。

監禁された蒋介石はこれらの要求を強硬な態度で拒絶します。国民政府軍は再びファルケンハウゼン中將の策を実行して張学良を攻撃しました。

毛沢東は「殺蒋介石抗日」を主張しましたが、ソ連のスターリンの介入があって「10日以内に蒋介石を釈放せよ」との密伝命令であった。スターリンの目的は蒋介石と連合して日本と戦うことであったと言われています。中国共産党はスターリンの指示に従い蒋介石を釈放し、抗日戦の前線に立たせる方針をとった。

12月25日に蒋介石は釈放され、1937年1月26日は無事に南京に生還しました。

これが西安事件の概要です。中国の内戦、クーデター、共産党との戦い、更にソ連が絡み、ドイツの関与が見え隠れする複雑怪奇の事件ですが、**1937年9月には「国共合作（第二次）」を成立させる土壌をつくり、抗日民族統一戦線を確固にする事件**となります。然し日本はこの事件を軽く見過ごして（国際的に孤立して情報が不足していた）中国は武力でいいなりになるという驕りが矯正されることはありませんでした。

壊滅寸前であった中国共産党はソ連の助けによって息を吹き返し、蒋介石と共闘、離反を繰り返して新しい国家建設に向かいます。

6,華北分離作戦

華北5省はもともとは内蒙古にあたります。（p12地図参照）

関東軍にとって内蒙古は対ソ連戦の基地として重要でした。察哈爾（チャハル）、綏遠（スイエン）へ進出をし内蒙古全体を支配下に置くことを目論み機会を狙っていました

1933年7月「徳王」が関東軍の後押しで綏遠省に進出を目的として、百靈廟に自治運動を始め、1934年2月「蒙政会」を設立し1936年5月には「蒙古軍政府」を樹立させました。

国民政府は対抗組織として「綏境蒙政会」を設立します。

11月9日蒙古軍が日本の田中隆吉中佐の指導、日本製の武器を使用して「東亜より共産党と国民党（蒋介石）を駆逐すべし」と発表し綏遠省に進攻し、19日関東軍飛行隊の支援を受けて攻撃を開始しましたが大敗して、田中隆吉は飛行機で逃亡します。中国軍は始めて日本軍に勝ったのです。この勝戦意識は少なからずその後の戦闘に影響を与えたと考えられます。

然し関東軍は綏遠占領を諦めたわけではない。翌年の話になりますが

1937年9月張家口に察南自治政府、10月に大同に晋北自治政府と厚和に蒙古連盟自治政府を設立させ、三自治政府の相互善隣関係を促進するため三政権の連絡機関として蒙疆聯合委員会を設置しトップを「徳王」とし、蒋介石の国民政府から離脱しました。「蒙疆はソ連と外蒙古の防波堤となる。防共が

目的、漢人、蒙古人、ウイグル人の各民族一致団結し防共の第一線に立つことが聖なる使命である」と関東軍に踊らされて作らされたのが徳王でした。。そして、関東軍は再び綏遠省に進攻します。

華北分離作戦はこのように表向きは侵略ではなく、郷土住民の自治組織を作り蒋介石の国民政府から離脱するという形態をとりながら、実質では軍事顧問、経済顧問を送り込み裏側から金力を用いて華北5省からなる経済圏を作り日・満・華の円ブロック経済圏の形成をめざした関東軍と陸軍の共通の戦



略に発展していました。地政学的にはソ連からの共産思想の侵入を防ぎ、経済的にはドルブロックとの対抗を狙ったものです。

説明資料

(1)南進論

満州事変後中国では排日・抗日運動が盛んになったが1934年から中国共産党の武装集団、抗日ゲリラ戦を各地で起こし始めた。関東軍は片方で国民政府軍（蒋介石・張学良）と武力衝突をしながら、執拗な共産軍抗日ゲリラと戦わねばならず、多数の戦死傷者を出し続け、満州国の経済建設もかけ声ばかりであった。強固な政治体制を狙って1934年には満州国は帝政となり、満州軍は関東軍司令官が全権を握ることになった。然し日本国内では関東軍への批判が露わになった。

「満州事変勃発直後には満州国があたかも無尽蔵の大資源を包蔵するかのごとく宣伝せられ、大陸政策の強硬を謳歌せしめられた。だが、その後、真相が追々明るみへもちだされてみると、これらの宣伝がいかに事実と相隔たる遠いものであるかが判明した。日露摩擦の危険を犯してかくのごとく利益の少ない大陸政策を強行するは、いたずらに国力の摩滅をもたらすのみであるから、ここで大陸政策に見切りをつけ、方向を転じて南方に進むべきである。即ち日本の生産、貿易、移民の発展並びに国土上必要なる資源の供給を満州のみに期待することは甚だしく高価危険であるのみならず、かつ不可能である」海軍の主張を代弁したものである。

南進論者は「武力に訴え多大な犠牲と戦費を払ってまで、満州国を建国したが結果は失敗であり、満州国は日本にとって厄介なお荷物になっただけだ。こんなことになるくらいなら、最初から満州事変を起こさなければよかったのだ」と陸軍を攻撃するような発言もしている。

南進とは具体的には日本が石油を輸入している蘭印（スマトラ、ジャワ、セレベス、ボルネオ、ニューギニア）を中心に東はハワイから西はマレー半島、南は豪州、ニュージーランドに至るアジア大陸南部と太平洋上の一切の島嶼（とうしょ・島々）である。これらの地域は米・英・仏・蘭国の支配が及んでいる。南方進出はこれらの国との交渉又は戦争を覚悟しなければならぬ。実際に行動は1940年から始まる。。

(2) 広田三原則

（対支政策に関する外務省・陸軍省・海軍省三相間諒解）

①中国側に排日言動の徹底的取締りを行わせ、且つ欧米依存政策より脱却させる。

（蒋介石は既にアメリカから航空機を輸入し、イギリスの支援で貨幣統一に成功していた）

②満州国を正式承認させる。当面、満州国の独立を事実上黙認させる。満州国と接している華北方面では満州国と経済的及び文化的な融通提携を行わせる。

（さしもの関東軍にも傀儡政府満州国の建国に後ろめたさがあったのか？）

③外蒙古より来たる共産主義の赤化勢力の脅威に対して共同防共をさせる

広田三原則は国民には秘密とされ、国民が知らないところで軍部と財閥や政治家が結託して戦争体制を強固にしていった。

(3) 胡適の予見

胡適（こてき）とは1938年駐米国大使、北京大学教授、社会思想を専門とする。マルクス・レーニン主義を批判、蒋介石の懐刀的存在、1949年共産党が国共内戦に勝利するとアメリカに亡命した。1957年から台湾へ戻り外交部顧問を務めた人

西安事件に関して「西安事変がなければ共産党はほどなく消滅していただろう。――西安事件が我々の国家に与えた損失は取り返しのつかないものだった」

1935年からの日本の行動の予言的発言

「中国は絶大な犠牲を決心しなければならない。この絶大な犠牲の限界を考えるにあたり、次の三つを覚悟しなければならない。。第一に、中国沿岸の港湾や長江の下流地域が全て占領される。そのためには、敵国（日本）は海軍を大動員しなければならない。。第二に、河北、山東、察哈爾、綏遠、山西、河南といった各省は陥落し、占領される。そのためには、敵国は陸軍を大動員しなければならない。第三に、長江が封鎖され、財政が崩壊し、天津、上海も占領される。そのためには、日本は欧米と直接に衝突しなければならない。我々はこのような困難な状況下におかれても、一切顧みないで苦戦を堅持していれば、二、三年以内に次の結果が期待できるであろう。――中略

満州に駐在した日本軍が西方や南方に移動しなければならなくなり、ソ連はつけ込む機会が来たと判断する。世界中の人が中国に同情する。英米及び香港、フィリピンが切迫した脅威を感じ、極東における居留民と利益を守ろうと、英米は軍艦を派遣せざるをえなくなる。太平洋の海戦がそれによって迫ってくる。以上のような状況にいたってからはじめて太平洋での世界戦争の実現を促進できる。したがって我々は、三、四年の間は他国参戦なしの単独の苦戦を覚悟しなければならない。日本の武士は切腹を自殺の方法とするが、その実行には介錯人が必要である。今日、日本は全民族切腹の道を歩いている。上記の戦略は「日本切腹、中国介錯」というこの八文字にまとめられよう」加藤陽子さんはこの資料を読んで

「1935年の時点での予測ですよ。なのに45年迄の実際の歴史の流れを正確に言い当てている文章だと思います」と指摘している（「それでも日本人は戦争をえらんだ」p325-327）

加藤陽子さんは、胡適と論争した汪兆銘の言葉も載せています。

「胡適の言うことはよくわかる。けれども、そのように三、四年にわたる激しい戦争を日本とやっている間に、中国はソビエト化してしまう」と反論している。結果は両方が実現することになるが、中国は南京を占領され武漢を陥落され重慶を爆撃され、海岸線を封鎖されても降伏はしなかった。その忍耐強さは、胡適や汪兆銘の深い決意、思想が国を支えたと言われる。

(4)石橋湛山の満蒙放棄論

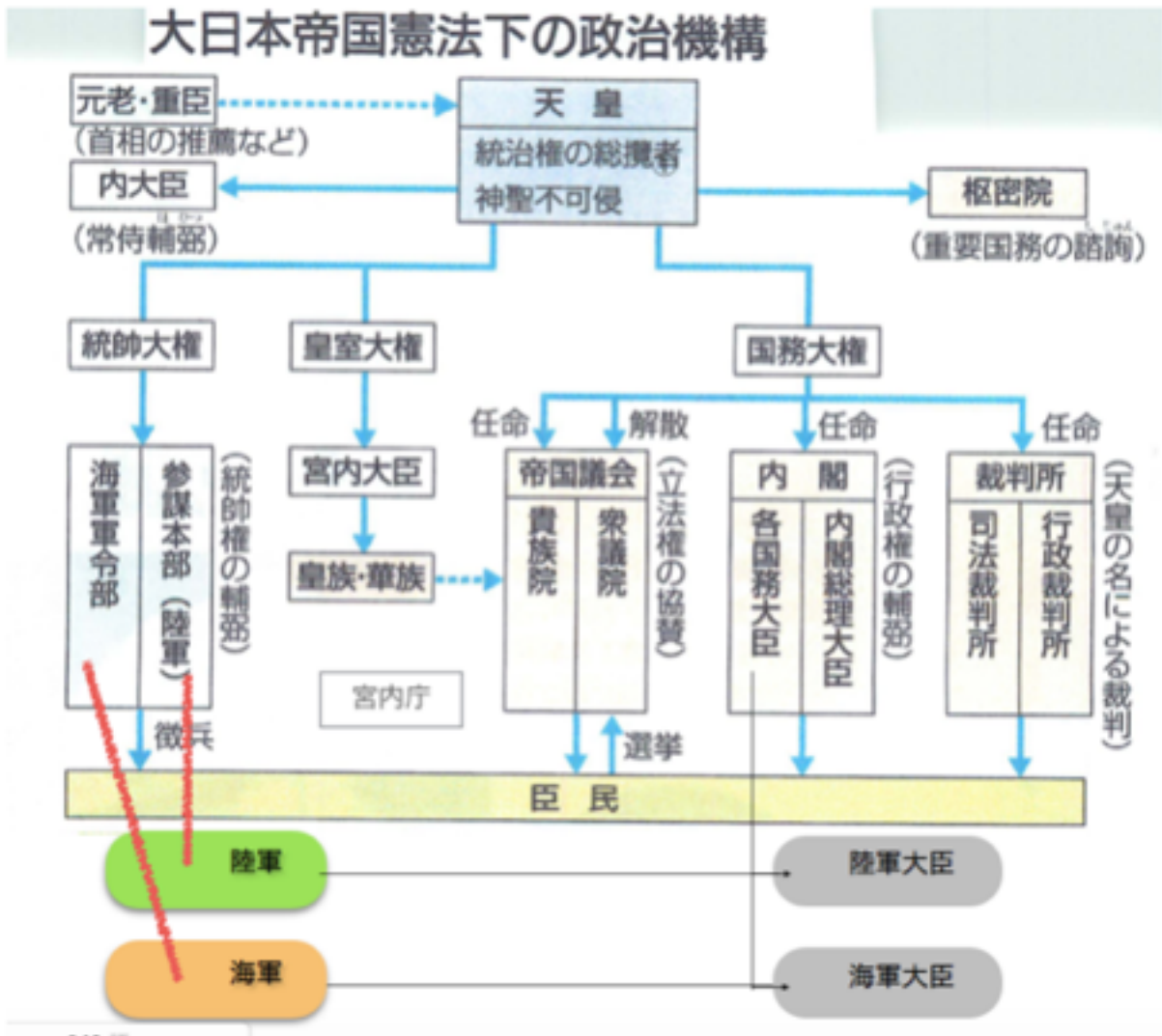
石橋湛山は1919年始から「日本は満蒙の特殊權益を放棄すべきである。満蒙は日本の生命線にはならない。逆に日本の生命権を脅かす」と喝破しています。「満蒙は日本の過剰人口の受け皿にはならない、資源供給地ともならない。満蒙を領有すれば中国人の反感を買うばかりでなく、欧米列国をも敵にまわし、ソ連との緊張関係が増し紛争を誘発しかねない（後にノモハン事件）胡適よりも前に鋭い先見力で日本の政界を戒めています。

現在甲府市内に「石橋湛山記念館」があり、地道な平和運動を進めています。私は功刀先生の紹介で足を運び維持会員の末席に参加させていただきました。

（私見）満蒙進出で利を得たのは、中央でポストを得られなかった官僚です明治政府の主要ポストは幕末の雄藩に独占されていたので、政党のメンバーは不平不満を言っていましたところ、福沢諭吉は不平不満を言わずにポストを新しく作ればいいと助言？します。「朝鮮が日本の自由になれば、その新

天地に出かけて行ってポストをとればいい」私はこのポスト進取が官僚と軍人を動かした要因であると考えます。文献に出てくるポストの数は多くて複雑怪奇です。ポストは責任を果たさない組織の幻です。

明治憲法下の政治機構を再掲します。
 軍隊の位置の複雑さを確認します。



参考文献

- 「昭和史・1926-1945」半藤一利著・平凡社刊
- 「アジア・太平洋戦争史(上) 山中 恒著 岩波現代文庫
- 「図説・日本史」東京書籍、1997年版